



Title	言語接触かドリフトか：河湟語の場合
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 2007, 34, p. 65-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語接触かドリフトか
—河湟語の場合—

角 道 正 佳

Language Contact or Drift
—The Case of Shirongol Mongolic—

KAKUDO Masayoshi

The aim of this paper is to show that some language contact induced changes discussed by Róna-Tas, Jalsan, Ichinose, Field and Slater can be regarded as drift and show typical example of language contact induced change and drift. Initial consonant cluster formation in Mongghul as Tibetan influence stated by Róna-Tas is basically correct, but close examination of Shirongol Mongolic shows that each language has each consonant cluster patterns and detailed description is necessary. The usage of dative-locative case in Shera Yögur language which Jalsan discussed as Tibetan influence is not an isolated phenomenon but widespread phenomenon in Shirongol Mongolic. The change $i > \text{ə}$ which Jalsan regards as Tibetan influence occurred not only in Shera Yögur but also Donggou dialect of Mongghul widely, while it didn't occur in other dialects. This shows transitional influence of Amdo Tibetan in various languages. Ichinose maintains that zero converb in Dunshang is influenced by Chinese. However, since it is found more or less in Shirongol Mongolic, her argument has little evidence. Retroflexed consonants are abundant in Dunshang and they are clearly language contact induced phenomenon, but occurrence environment of retroflexed consonants differs from language to language. The tendency of avoidance of syllable final consonant which Ichinose asserts to be Chinese influence is found not only in Dunshang but also in some dialects in Mongghul and Kangjia. Dunshang and Mangghuer syllable structure changed in different manner in spite of the fact that syllable template of both languages are the same as that of Chinese. Consonant palatalization found in Kanjia and Dunshang is a good example of language contact induced change. Velarization and loss of the word final nasal found in all Shirongol Mongolic other than Shera Yögur is a good example of drift, where each language shows each stage of development.

0. はじめに

中華人民共和国の青海省および甘粛省で話されている東部裕固語、土族語、保安語、康家語、東郷語を総称して河湟語と呼ぶことがある。土族語は土族語互助方言と土族語民和方言に大別されるが、Janhunen (2003) は Mongghul 語、Mangghuer 語という独立した言語であると主張している。しかし、この名称は現在十分には認知されていないため、従来の表現を用いることにする。

本論文の目的は、先行研究で指摘されてきた言語接触を再検討し、必ずしも言語接触によって生じた変化とは言えないものがあることを主張するものである。先行研究の中には、河湟語のどれか一つの言語だけに注目し、その言語のある特徴が漢語（中国語）あるいはチベット語の影響によって生じたものであると論じているものがある。しかし、河湟語の他の言語も同時に検討すると、同じような特徴が観察される場合があり、その現象は隣接する言語による影響と考えるよりも、共通の特徴と考えたほうがよいと思われるものがある。例えば、チベット語との言語接触によって生じた現象と論じられているものが、チベット語の影響をほとんど受けていないと思われる別の言語にも見られる場合、言語接触を原因と考えるよりは、共通の特徴あるいは傾向と見なすべきであると思われる。こういった現象が河湟語を除く蒙古語に見られない場合は蒙古語祖語にはさかのぼれないまでも、河湟語祖語にさかのぼれる可能性がある。祖語にはさかのぼれない場合でも共通した変化の方向性が感じられ、その変化のある段階が各言語に現れていると考えられる。

『言語学大辞典』第6巻によると、ドリフト (drift 駆流、偏流) は Sapir の *Language* で、「言語変化は言語使用者の間でランダムに現れるさまざまな逸脱や変種の中で、ある特定の方向へ向かうような変種だけが話者によって意識的に選択され、それらが集積されることによって実現される」と述べられており、第6章では、「言語を他の社会的産物と同様、均衡のとれたパタン、換言すると類型 (type) に向かわしめる強力な駆流が言語史の表層の背後にある」また第7章では「言語変化には、ある特定の方向に累積される個人的偏差を話し手が無意識裡に選択することによって生じる駆流があって、その方向は概してその言語の歴史的前歴から推断できる」と述べられている。駆流の例として Sapir が挙げているゲルマン語の母音推移、すなわち「西ゲルマン語から英語とドイツ語が分裂した後両言語の接触なしに、両言語に共通のウムラウトが現れた。中高ドイツ語よりも約300年前に英語の方に先にウムラウトが現れた。このような言語自身に秘められた内的変化をドリフトという」というのが本稿で論じたい立場を最もよく表している⁽¹⁾。

1. 先行研究

河湟語の先行研究では Róna-Tas (1960a) が土族語の語頭子音連続の発生についてチベット語の影響を論じている。この見解は基本的には正しいと思われるが、河湟語の他の言語も対象にして検討すると若干補足が必要になってくる。Róna-Tas (1960b) はさらに東部裕固語におけるチベ

ット語の借用語について記述し、Róna-Tas (1966) では土族語の借用語とチベット語の関係を論じている。また樋口 (昭 58 = 1983) は Róna-Tas (1966) を再検討し主として土族語における *p の発展について論じている。Li (1986) は臨夏の保安語における漢語からの借用語について、漢語臨夏方言の 44, 42, 24 の調値を持つ音節が保安語では高いトーンになり、臨夏漢語の 22 の調値をもつ音節が保安語では低いトーンになるという事実を明らかにしている。高いトーンは一語中に一箇所以上あることもあるという点が重要である。阿・舍勒夫、馬国忠、阿・伊布拉黑麦、陳元龍編著 (2000) の辞書の表記によると、東郷語にも類似した現象が見られるが、隣接した漢語の声調を記したデータがないために詳細は明らかではない。栗林 (1988) は康家語を除く河湟語について言語接触を論じている。陳 (1988) は語彙の面から、東部裕固語 (紅石窩)、土族語 (互助)、東郷語 (鎖南坝)、保安語 (同仁) の諸言語で漢語、チベット語等の借用語がどれぐらいの割合を占めているかを示している。漢語借用語の占める割合は、東部裕固語 9.60%、土族語 (互助) 18.69%、保安語 (同仁) 9.04%、東郷語 49.20% であり、チベット語借用語の占める割合は、東部裕固語 2.59%、土族語 (互助) 5.85%、保安語 (同仁) 53.62%、東郷語 0.03% である。ちなみに康家語の借用語を孫玄開主編、斯欽朝克圖著 (1999:278-307) の語彙リストに基づいて計算すると、漢語借用語は 23.3%、チベット語借用語は 0.07% である。東郷語における漢語借用語の割合および保安語 (同仁) におけるチベット語借用語の割合は共に約 50% 前後にも及ぶ。Жалсан (1993) は東部裕固語におけるチベット語の影響を借用語、音声の影響の例、若干の格の特徴、語義の面から取り上げている。後者 3 点については再検討を要するので、以下で詳しく論じる。一ノ瀬 (1994) は東郷語について漢語からの干渉を音韻、形態、統語、語彙の面から論じている。音韻のうちの音節構造の改変、形態のうちの動詞語幹による副動詞形成に関しては再検討を要するので以下で詳しく論じる。佐藤 (1996) はチベット語アムド方言からの借用語の面から保安族とチベット族の民族接触を論じている。Field (1997) は東郷語について概観しており、その中で東郷語の音節構造が隣接する漢語方言と共通点を有することを論じているが、この主張は一ノ瀬 (1994) の主張と同じである。Field は音節構造に関する詳細なデータを提供してくれているが、声調については何の言及もない。Slater (2003) は土族語民和方言 (Mangghuer) に関する本格的な記述であるが、言語接触、特に音節構造に関しては Field と同じような発言をしている。

2. Róna-Tas の主張について

Róna-Tas (1960a, 1966) は土族語に借用されたチベット語の形を研究し、土族語で可能な語頭子音連続の型がチベット語の影響によって生じたと論じている。語頭子音連続は、 $\#C_1VC_2$ あるいは $\#VC_1C_2$ の V が脱落した結果、 $\#C_1C_2$ という連続が生じることによって起こるのであるが、この連続がチベット語で可能な場合に限って第一音節の母音が脱落するという主張である。ところで土族語には $\#VCV$ の最初の母音が脱落する現象も頻繁に見られ、この現象はチ

ベット語とは無関係だと思われるので、母音脱落の条件を直接チベット語の影響に結びつけることはできない。河湟語には多かれ少なかれ語頭母音の脱落が見られる。次の 1～11 はそういった例である。□が母音脱落を表すが、どの言語のどういう条件で母音が脱落するかを規定するのは難しい。東部裕固語は照那斯圖編著（1981b:93-107）、土族語は照那斯圖編著（1981a:93-107）、保安語は布和、劉照雄編著（1982:81-93）、東郷語は劉照雄編著（1981:109-121）の詞彙付録、康家語は孫玄開主編、斯欽朝克圖著（1999）から引用する⁽²⁾。

文語	東部裕固語	土族語	保安語	康家語	東郷語	
1 emüs-	□mēs-	□muse-	□musi-	□mēsü-	□misü-	着る
2 ebesün	□wesen	□vese	□uesun	□veisun	□osun	草
3 ebüdüg	□vedeg	□vudeg	ebdeg	□veideu	□odeu	膝
4 ayaya	aika	□jaca	ajiya	ajika	□iya	枕
5 ülü	□le	□lii	□le	□ne	ulie	不
6 imayan	□maan	imaa	imaŋ	imo	iman	山羊
7 ene	ene	□ne	ene	ene	ene	これ
8 adali	—	□dale	adeli	adali	—	同じ
9 edür	udur	□dur	uder	uder	udu	日
10 üyle	ulee	ule	□le	ile	uilie	仕事
11 uyila-	yyla-	ulaa-	□la-	ila-	uila-	泣く

Róna-Tas（1960:267）はチベット語では fl という語頭子音連続が不可能であるため、蒙古語祖語の*pulayan に対応する第一音節の母音は土族語では脱落しないと述べているが、12 に示すように東部裕固語では第一音節の母音が脱落した結果を示している。13 も類似した例である。■は第一音節の母音のみならず、語頭子音も脱落していることを示す。Krippes（1992）の主張に従うと、12 の再構形は*pulayan、13 の再構形は*inege-であって、13 のほうには語頭の子音はないが、河湟語祖語には語頭子音を再構せざるをえないであろう。

文語	東部裕固語	土族語	保安語	康家語	東郷語	
12 ulayan	■laan	fulaan	fulaŋ	fulo	xulan	赤い
13 iniye-	■n.ii-	cinee-	cinee-	ʃine-	ciniē-	笑う

河湟語のどれかで語頭子音連続が起こっている語の例を以下に述べる。□は語頭開音節の母音が脱落したもの、▲は閉音節の語頭母音が脱落したもの、▽は閉音節の語頭母音が脱落した後、生じた子音連続の最初の子音も脱落したもの、__ は音節初頭子音を持っている第一音節の閉音節

の母音が脱落したもの、■は音節初頭子音を持っている第一音節の閉音節の母音が脱落した後、生じた子音連続の最初の子音も脱落したもの、■は語頭母音が脱落し子音が添加したもの、◇は語頭に鼻音が添加したものを示す。結果的に語頭子音連続が生じている語の右肩に*を記す。

文語	東部裕固語	土族語	保安語	康家語	東郷語	
14 ide-	ede-	□ de-	■nda-*	ide-	idzie-	食べる
15 üjügüür	□ dzyyr	■dzuiur*	udzir	udzir	udzu	先
16 oči-	—	■dza-*	□ dzi-	□ dži-	etšw-	行く
17 erte	▲rde*	▲şde*	ete	ete	etcie	早い
18 umdayas-	—	▲ndas-*	▲ndasə-*	—	undasu-	渴く
19 öndegen	—	▲ndegə*	əndegi	əndeye	əndeyəi	卵
				andeye		〃
				▲ndeye*		〃
20 angyai-	aŋkii-	▲ŋgaii-*	anyi-	aŋgei-	aŋgei-	開く
21 anjisun	—	▲ndzase*	andzisun	andzasun	andzasuŋ	鰍
22 asayu-	—	▲sca-*	ascə-	aswɤ-	asa-	尋ねる
				aswɤ-		〃
23 ende	ende	▲ndaii*	—	ende	əndə	ここ
24 öndür	uŋdur	▲ndur*	under	under	undu	高い
25 eljigen	əldziyəŋ	▽dzige	əndzige	▲ndziye*	əndzəyə	ロバ
26 sidün	ŋden*	şde*	şduŋ*	şiduŋ	şwduŋ	歯
			■duŋ	ŋduŋ*		〃
27 yeke	ŋge*	şge*	ŋgo*	■gu	fugie	大きい
			■go			〃
28 čida-	ŋda-*	şda-*	şda-*	ŋda-*		できる
29 takiya	daχaa	taçauu	təχa	taχa	twca	鶏
			tχa*	twχa		〃
				tχa*		〃
30 ači-	atʃa-	■dzaa-*	atci-	atʃi-	atšw-	積む
31 egüden	yden	ude	■ndaŋ*	ido	uidzien	門
32 üje-	edze-	udze-	■ndzie-*	udze-	udze-	見る
				udzi-		〃
33 jayun	dzuun	ndzoŋ*	dzyŋ	dzun	—	百
		◇		dzyn		〃

34	ükü-	<u>h</u> gu-*	fugu-	<u>f</u> gu-*	■ gu-	fugu-	死ぬ
				■ gu-			〃
35	iče-	hidʒe-	<u>ɕ</u> dʒee-*	■ dʒie-	<u>h</u> dʒi-*	ʂudʒe-	恥じる
					<u>ʃ</u> dʒi-*		〃
					■ dʒi-		〃

『保安語詞彙』には *ndʒeŋ* 「百」という語頭子音連続が記録されている。また、土族語東山方言では他の方言にはある語頭の鼻音＋子音の連続が回避され、鼻音が脱落している。なお東郷語には語頭子音連続は存在しないが、布和（1983）には *sd*, *sdz* が現れ、布和編著、硯精扎布校閲（1986:45）は *sr*, *ʂd*, *ʂdz*, *fd*, *fg* という語頭子音連続を認める立場をとっている。以上の現象を観察すると、単純にチベット語の影響では説明できないことが分かる。

3. Жалсан の主張について

Жалсан（1993）は東部裕固語におけるチベット語の影響について、借用語、音声の影響の例、若干の格の特徴、語義の面での影響について論じている。まず若干の格の特徴について検討する。

3. 1. 格支配

Жалсан（1993: 119-200）は以下に示す東部裕固語の与位格（下線部）がチベット語の影響によるものであると主張している。

東部裕固語	チベット語
<i>mune ny:rtə xalda</i>	<i>khong gi shal la ltos ʂig</i>
私の 顔を 見てください。	彼 の 顔 を見る
<i>dianjiŋde xalda</i>	
映画を 見なさい。	
<i>lomogte tʃegen talja</i>	<i>glu dbyang hdi la nyoncig</i>
物語を 聞こう。（～に耳を置く）	音楽 ← この を 聞く
<i>ʃaβəde sura</i>	<i>mi rigs skad lugs la shib hjug byed dgos</i>
ラマに 尋ねなさい。	民族の言語を 研究しなければならない。
<i>mune neredə tuja gədeg bei</i>	<i>ngahi ming la seng ge zer gi yod</i>
私の 名前は トヤ です。	私の 名前 は センゲー です。

東部裕固語がチベット語の影響を強く受けているのは事実であるが、格支配の実態を河湟語の他の言語にも広げてみると、必ずしもチベット語の影響とは言い切れないことが分かる。「～に

尋ねる」という表現は河湟語のすべての言語で与位格を要求する。東部裕固語、土族語互助方言、保安語、東郷語に関するこの事実は Тенишев, Тодаева (1966:72) ですでに指摘されている。土族語民和方言、康家語についても同じことが言える。東部裕固語以外の例を1例ずつ示す。チベット語の影響をほとんど受けていない東郷語でも同じ格を要求するという点は非常に重要である。蒙古語の他の諸語(方言)では「～に尋ねる」は奪格を要求する。達斡爾語のみ奪格以外に与位格または方向を表す語を取りうる。

土族語互助方言

与 ... şba:vac sge:nə baja:n kunde sdzacadza. 『土族語話語材料』258

蛙は 見て 金持ちに 尋ねた。

民和方言

与 mali pudera xi danang binbier ge=du erseghe-ji, 『中国民和土族民間故事』16(42)

急いで 走って 行って 兵士に 尋ねた。

保安語

与 tci ese medesa ga:geda asxa. 『保安語和蒙古語』108

あなたは 知らないなら 兄に 尋ねなさい。

康家語

与 tʃi aba-da asem! 『康家語』99

あなたは 父に 尋ねなさい。

東郷語

与 awei-ni otciendene asadzi wo. 『東郷語話語材料』152

父は 娘に 尋ねた。

「～を見る」についてはまず次の点を指摘しておかなければならない。東部裕固語には「見る」を表す語は xalda-以外に edge-があり、対格を要求するということである。xalda-は確かに与位格を取りうるが、対格も取ることができる。『東部裕固語話語材料』よりすべての例を示す。

東部裕固語

edge-

対格支配(ゼロ形式も含める)

tere hkön tere şaltan kyken edgege: jaβa:dsan bə gēni:.

その 娘は その 貧しい 息子を見て 行った。『東部裕固語話語材料』171

tʃə ondor jima htʃarte omoneŋwa şaltagi:n edgege:

おまえは 今日 なぜ 非常に 貧しい者を見て

əŋgedʒe ɕaɕɕdaɕa: n.i:βeʔ! 『東部裕固語話語材料』186

こんなに 大笑いしているのか。

xalda-

与位格支配の例

bu ɛŋxəde xaldala kursende ... 『東部裕固語話語材料』31

私が 恩和（人名）に 会いに きたとき

kyken tolɕoidi:nə xaldadʒ xaldaca:, 『東部裕固語話語材料』160

男の子は 頭を 見ながら

dʒi:de:n xaldala jaββa. 『東部裕固語話語材料』119

甥に 会いに 行った。

tʃe tʃaidai: n ny:rte xaldasa kunse hkəgure βamna:

おまえは 息子の 顔を 見ると 人から 遠く離れている。

『東部裕固語話語材料』131

tʃe mune zacaɭe xaldan xaldan uɭeja:n ba. 『東部裕固語話語材料』181

あなたは 私の 肖像を 見ながら 仕事を してください。

tʃe ɕagtʃa dagqar nanda xaldadʒe lə n.i:sen bi:le:.

あなたは 一回も 私を 見て 笑わなかった。

『東部裕固語話語材料』186

bu tʃeməde təngege: xaldaca: n.i:k(ə) βi. 『東部裕固語話語材料』186

私は あなたをこんなに 見て 笑っています。

対格支配の例

ʃeŋʃana ene taidʒi:n xaldadʒβa. 『東部裕固語話語材料』132

シェンシャナ（人名）は その 王子を 見た。

de:ri:nə nege xaldaca:, 『東部裕固語話語材料』168

上を ちょっと 見て

tʃe ke:nə xaldadʒ abna? 『東部裕固語話語材料』173

おまえは 誰を 見るか。

土族語互助方言のケースについては角道（1991:39-40）で述べたので、結果だけ示す。Тодаева（1973）、Schröder（1959, 1970）、Heissig（1980）の1-2450行の範囲で実数を示すと次のとおりである。

土族語	与位格 -du	位格 -re	方向 -ji	対格 -nu	位格＋対格 -re-nu	ゼロ
sge-	2	1		4		3
uje-	5	2		5	1	4
nau-	6		1	1		

土族語民和方言はほとんど対格を要求するが、与位格、位格、方向格も取りうる。対格以外の例を記す。

与位格（=du）支配の例

Qimei nao-sa guori wuruang-ku kong bang bai. 『中国民和土族民間故事』 30(33)

おまえを 見ると よその 地方の 者のようだ。

Ai xinhualuo-ku muni bian=du nao. 『中国民和土族民間故事』 222(259)

信じないなら 私の 体を 見なさい。

位格（=di）支配の例

Gan san-ge=la terghai=di nang dianli danang liang=di ge nao-sa,

彼ら 三人が 頭を 上げて 梁を ちょっと 見ると

『中国民和土族民間故事』 224(287)

方向格（=juji, =ji）支配の例

Ali Ajia chuanguang=sa ghada=juji ge nao-sa,

アリ 姉さんが 窓から 外を ちょっと 見ると

『中国民和土族民間故事』 56(186)

niu=ji ge ji-lang. 『中国民和土族民間故事』 176(101)

こちらを ちょっと 見た。

tiu=ji ge ji-lang. 『中国民和土族民間故事』 176(102)

あちらを ちょっと 見た。

保安語は対格を要求する。

edzan teinda usgegune mbou? 『保安語話語材料』 46 teinda は与位格・対格

彼は あなたを 見るだろうか。

ge:dzine si:terne udzigu deran ... 『保安語話語材料』 75

自分の 影を 見 たくて

cag delane udzidzi. 『保安語話語材料』 75

四方を 見た。

康家語は対格を要求する。

tʃɪŋtsoni udʒidʒi uysina. 『康家語』310, 315

家庭を 見て 与える。

東郷語は与位格または対格を要求する。

与位格支配の例

luɣe həni gotʃani qaruludʒi iregawo u ui jə giədʒi soxi borunde

鹿が 彼の 角を 返しに こない か と 左 右を

udʒədʒi wo. 『東郷語話語材料』79

見ていた。

dau idʒuandəne udʒədʒi wo. 『東郷語話語材料』70

まだ 周りを 見ていた。

対格支配の例

Γajini udʒəsə hō kuruvə. Дунсянский язык 「兄と弟」73

兄を 見ると 腹が立った。

Niənəigie ipədənə buala gogaii niə udʒəsə niənəigieni tuguivə.

お婆さんが 帰ってきて 二人で 鍋を 見ると お婆さんのは 生だった。

Дунсянский язык 「カブを煮る」83

Niə ududəni niə taulei javudʒy niə budəu шыда эчисəну усудə

ある 日 兎が 井戸の ところへ 行って 水に

gojiane udʒəvə. Дунсянский язык 「虎と兎」101

自分を 見た。

チベット語の強い影響を受けていると思われる保安語、康家語が対格を要求し、チベット語の影響をほとんど受けていないと思われる東郷語が与位格を取りうるということから判断して、「見る」が与位格を要求するというのはチベット語の影響とは考えにくい。

河湟語の諸言語で述語がどのような格を要求するのかを検討すると、例えば次のようになっている。参考のため達斡爾語及びモンゴル語を付け加える。

	東部裕固語	土族語互助	土族語民和	保安語	康家語	東郷語	達斡爾語	モンゴル語
1 「～を見る」	与	对/与	对/与	对	对	对/与	对	对
2 「～に尋ねる」	与	与	与	与	与	与	与/与/方	与
3 「私の名前は.... といいます」	与							对

4	「～に...させる」	与	与	与/対	与/造	与/造	与	造	造
5	「～を恐がる」	奪	奪	奪	奪	対	奪	奪/与/対	奪
6	「道を行く」	造	対/造	対/与	奪		与	造	造
7	「馬に乗る」	対	位/対	対		対	対/上	与/対	対
		与：与位格	対：対格	造：造格	奪：奪格	上：「上」という語彙			

Жалсан (1993) の主張は上の 1, 2, 3 の与位格がチベット語の影響であるということであったが、与位格を要求するのは 4 もそうである。モンゴル語でも受益者や goal を表す「～に食べさせる」「～に見せる」の場合は与位格を取るのが普通であるが、河湟語ではさらに動作主を表す場合も与位格が広く用いられるという共通の特徴がある⁽³⁾。3 については並行例が見当たらないので詳細は分からない。

3. 2. 「主」 = 「私」

Жалсан (1993:202) は東部裕固語の edʒen が「主」、「他の」「私」の意味で用いられるのは、チベット語の bdag の影響であると主張している。チベット語の bdag は「主」、「他の」という意味で用いられる以外に、《Bodhicaryāvatāra》(入菩提行経) に「私」の意味で用いられた例があると述べている。東部裕固語の edʒen に対応する土族語は njeen であるが、「私」の意味で用いられた例が土族語互助方言の下位方言である哈拉直溝方言を記した Тодаева (1973) の III 2 「蛙」、III 5 「マンガス」、III 7 「妻」、III 9 「白い皇帝と黒い皇帝」、III 11 「黒馬」及び沙塘川方言を記した Heissig (1980) に見られる。しかし東溝方言、丹麻方言、天祝方言には見当たらないことからチベット語の影響にしても一部にしか広がっていないことになる。

3. 3. i > e

Жалсан (1993) の主張するもう一つの点で再検討を要するものは、母音 e についてである。東部裕固語ではチベット語アムド方言の影響で i > e という変化が起こっているというのが彼の主張である。チベット語からの借用語以外の具体的な例が挙がっていないが、確かに東部裕固語の固有語における e の多くはモンゴル文語の i に対応するものである。またチベット文語の i がアムド方言では e になることが多いのも事実である⁽⁴⁾。

モンゴル文語の i または u に対応する東部裕固語の固有語の母音がどうなっているかを河湟語の他の言語もいっしょに示すと、次のようである。語彙の選択には照那斯圖 (1985:89) を利用した⁽⁵⁾。というのは同書において土族語互助方言と民和方言との違いの一つに母音の融合現象が挙げられているためである。民和方言の各種の母音が互助方言では [e] に融合していると照那斯圖は述べている。しかし以下の例から明らかなように、互助方言でも東溝方言は母音が融合しているけれども、他の下位方言では融合していない。互助方言の東溝及び民和方言の民和 1 は照

那斯圖 (1985:89)、哈拉直溝はТодаева (1973)、那龍溝は de Smedt, A. et A. Mostaert (1933)、沙塘川は Schröder (1959, 1970) 及び Heissig (1980)、民和 2 は Slater (2003) 及び Chen 他 (2005) より引用する。

文語	東部 裕固語	土族語							
		互助方言						民和方言	
								民和 1	民和 2
		東溝	哈拉直溝	那龍溝	沙塘川	民和 1	民和 2		
		ə	i, e	i, ɛ	i, ɛ	i, u, ə, e	i, u		
1	či	tʃə̃	tɕə̃	чи̃	tsĩ	tsĩ	tɕĩ	qĩ	おまえ
2	tani-	tanə̃-	tanə̃-	тан̃-	tañ-	tani-	tanĩ-	tani-	知る
3	qonin	xɔ:nə̃	xunə̃	хон̃	xoñ	xuñ	qoñ	khuoñ	羊
4	morin	mɔ:rə̃	morẽ	мор̃	mori	mori	—	mori	馬
5	quruyun	xurũn	xorə̃	хур̃	xur̃	xur̃	qurũ	khurũ	指
6	kedün	kedən	kədə̃	кид̃ін (sic)	kidi	kid̃	kedu	—	いくつ
7	čayasun	tʃɑ:sə̃	tɕaldzə̃	ч а лдз̃	tsĩ ɛ rdz̃	tsialdz̃	tʃarsə̃	—	紙

確実にチベット語の影響を受けているはずの保安語と康家語の例を以下に記す。əは保安語においてもわずかにしか見られないし、康家語では全く見られない。保安語同仁は陳乃雄等編 (1985)、保安語大墩は佐藤 (2004)、康家語は孫玄開主編、斯欽朝克圖著 (1999:278-307) に基づく。7の čayasun「紙」に対応する固有語は存在しない。

	保安語		康家語	
	同仁 大墩			
1	či	tɕi tɕi	tɕi	おまえ
2	tani-	tani- —	tani-	知る
3	qonin	geɲ gone	χoni, χuni	羊
4	morin	merə more	mori	馬
5	quruyun	— gor	guru	指
6	kedün	kudɛn kutuɲ	ɡudɔ, ɡedɔ	いくつ

結局、i > əは東部裕固語のみならず土族語互助方言の東溝方言でも広く起こっているが、他の方言にはほとんど起こっていない。チベット語の影響としても影響の及び方は言語(方言)によって大きく異なっている。

4. 一ノ瀬(1994)の主張について

一ノ瀬(1994)は東郷語について漢語からの干渉を音韻、形態、統語、語彙の面から論じている。まず動詞語幹による副動詞形成について検討する。

4. 1. ゼロ副動詞 (=動詞語幹)

動詞語幹による副動詞を以下ゼロ副動詞と呼ぶことにする。一ノ瀬の主張は漢語の影響により、東郷語ではゼロ副動詞が多用されるようになったというものである。

ゼロ副動詞は(1)複合動詞、(2)動詞の重複形、(3)動詞+補助動詞、(4)意味的独立性を有する2動詞の結合、(5)多動詞結合、(6)複述語をもつ単文、(7)複文に現れる⁽⁶⁾。(3)、(4)は中世蒙古語にもわずかに見られ(一ノ瀬(1994:188-190))、(2)はハルハ方言(一ノ瀬(1994:190))、(3)はjad-「～しかねる」がくる場合に限りチャハル方言(一ノ瀬(1994:190))では規則的にゼロ副動詞になるのに対し、漢語では(1)から(7)のすべての場合に可能である(一ノ瀬(1994:195-198))。(3)の補助動詞としてあげられている語はagi「取る」、etši「行く」、bai「いる」、da「～しかねる」、šida「できる」、tei ji「始める」である。Slater(2003:328)も土族語民和方言に関して同じような発言をしている。

(2)に相当する土族語互助方言の形は非分離副動詞で表される。以下、(1)、(3)、(4)に相当する河湟語でゼロ副動詞が取れる環境を示す。言語によって形式が違うので、モンゴル文語形で記す。čida-「できる」、yada-「できない」、sayu-「～ている」、oči-「～ていく、～てしまう」、ög-「～てやる、～てもらう」、bara-「～終わる」、yar-「出る」、ire-「～てくる」、yabu-「～ていく」、gege-「～ておく」である。

	čida-	yada-	sayu-	oči-	ög-	bara-	yar-	ire-	yabu-	gege-
東部裕固語	+	+	+							
土	+	+	+	+	+		+	+	+	+
族	+			+			+	+		+
語		+	+	+						
	+		+	+	+			+		
	+	+	+	+	+		+	+	+	+
民和		+	+	+	+			+	+	
保安語	『保安語話語材料』	+	+			+				
	Баоанский язык			+						
康家語	+	+						+		
東郷語	+	+		+			+	+	+	

『中国民和土族民間故事』には čida-「できる」に相当する語彙は全く出現しない。代わりに bol- に対応する語彙ばかり現れ常に結合副動詞を要求する。『東部裕固語話語材料』では čida-「できる」にはゼロ副動詞（12 例）と共に結合副動詞（5 例）が現れ、yada-「できない」にはゼロ副動詞（36 例）と共に結合副動詞（16 例）が現れる。いずれもゼロ副動詞のほうが優勢である。しかし、-d₃(e)or- (<-ju orki-), -d₃βa- (<-ju ab-) のように常に結合副動詞を要求する動詞もある。土族語互助方言の丹麻方言には čida-「できる」、yada-「できない」はゼロ副動詞と共に非分離副動詞も取りうる。また sayu-「～ている」、oči-「～てしまう」、ög-「～てやる」、yar-「～て出る、登る」、ire-「～てくる」、gege-「～ておく」にはゼロ副動詞と共に結合副動詞も取りうる。詳細は角道（2005:208-209）を参照されたい。

一ノ瀬（1994:193）には東郷語の tɕiji-「始める」がゼロ副動詞を取ると述べているが、結合副動詞や目的副動詞も取りうる。ゼロ副動詞は3分の1程度しか現れない。kɕji-「始める」についても同様である。布和等編（1987）及び Тодаева（1961）からすべての例を拾うと次のとおりである。布和等編（1987）には tɕiji-「始める」が結合副動詞を取るのが3例、目的副動詞を取るのが7例、ゼロ副動詞を取るのが5例ある。Тодаева（1961）では結合副動詞を取るのが2例、目的副動詞を取るのが2例、ゼロ副動詞を取るのが2例ある。kɕji-「始める」は布和等編（1987）にしか現れない。結合副動詞を取るのが3例、目的副動詞を取るのが6例、ゼロ副動詞を取るのが5例である。

そもそもゼロ副動詞がどれぐらいの頻度で出現するのかを調べてみる必要がある。以下に示すのは布和等編（1987）、Тодаева（1961）、阿・伊布拉黑麦記録、整理（1987）のテキストから φ sda-「できる」、φ da-「できない」を除いたすべての副動詞の現れる回数である。ゼロ副動詞には譲歩、仮定、目的、限界の用法はない。また非分離副動詞及び分離副動詞の -də の使用例は限られているので、結合副動詞、分離副動詞 -dəne と比較してみる必要がある。▮ はゼロ副動詞が結合副動詞より多い場合、__ はゼロ副動詞が分離副動詞より多い場合である。

話者	話の題	結合	非分離	分離		φ	譲歩	仮定	目的	限界
		-d ₃ i	-n	-dəne	-də		-sənu	-sə	-lə	-talα
白玉山	虎とヤクと狐	26		10		7	1	12	2	
"	ミラガギ	63		8			9	11	12	
馬雪天	スズメバチと燕	19		3		2		5	2	
"	ラマと大工	41		18	1	2		12	1	
"	白い羽毛の服	73		32	3	3		25	5	1
"	猫と虎			2		2		5	1	
"	諺	8						8		

		結合	非分離	分 離		譲歩	仮定	目的	限界	
話者	話 の 題	-dzi	-n	-dəne	-də	φ	-senu	-se	-lə	-tala
馬忠山	騙されたラクダ	20		3		4	1	3	2	1
"	どちらが年上か	14		6		$\frac{4}{3}$		2	1	
"	お婆さんの孫	45		44		8	5	34	11	1
"	謎々	5	7	2		2		3		
"	我々の風俗習慣	11		1		2		8	4	1
"	自分のことを話そう	34		12		1	8	16	2	
馬騰林	雄羊と雌山羊	14		4		4		16		
"	マンガス婆さん	25	2	14		$\frac{16}{23}$		40	10	
"	鍋漏漏	16		6		$\frac{23}{1}$		15	2	
"	家の上に誰がいるか	11								
"	泣いて鳴いて迎える	10	8	5				7		
馬騰龍	虎と兎	8		6		$\frac{11}{7}$		13	1	
"	馬仲英一揆を起こす	52	2	20		7		16	8	
"	馬金牙	37		7		7		7	3	
"	唐王李世明と汪暎斯	50		15		11		23	9	
馬蘭花	蛙娘	50		14	2	13	1	32	10	
柳森林	獅子と虎	17		17		3	1	8	3	
関占奎	コバクとフクロと鳳凰	17		19		7	1	15		
馬淑花	二人の息子の嫁	29		7		$\frac{10}{1}$		10		
馬進忠	角が出た人	3		1		1		5		
"	牛	2						2		
馬忠議	ハレイを歌う由来	16		4		2		3	2	
Тода- еваの インフ オーマ ント	兄弟	33		19	2	8	3	22	1	
	マンガス婆さん	25		26		4	6	28	5	1
	蕪を煮る(老婆の孫)	21	4	26		8	2	27	2	
	薪を採す人	29		24	1	9	6	36	2	
	マチエバ	23	5	12		2	2	16	2	1
	犬と猫	31	1	27	2	8	3	38	9	
	虎と兎	13		2		2	2	6		
	鼠とモグラ	9	2	1		$\frac{5}{5}$		4	1	
蘇菲葉	小さい孫	28	2	10	11	15	4	33	7	
"	兄弟	20		6	5	$\frac{10}{10}$		17	4	

以上のデータから東郷語で結合副動詞や分離副動詞に比べてゼロ副動詞が特に多いわけではないことが分かる。(2)動詞の重複形、(4)意味的独立性を有する2動詞の結合、(5)多動詞結合、(6)複述語をもつ単文、(7)複文にも現れうという点に注目すると、東郷語は土族語民和方言と共にゼロ副動詞が出現する頻度が極めて高いと言える。この点は漢語の影響と言えなくもないが、ゼロ副動詞自体は河湟語においてはごく普通の形式である。

4. 2. 反り舌音

一ノ瀬 (1994:180) は東郷語に関して蒙古文語の *j*, *ɕ*, *s(i)* に対して捲舌音の *dz*, *tʂ*, *ʂ* が対応すると述べている。 *dz*, *tʂ* については固有語の子音までもがすべて捲舌音(反り舌音)になっている。反り舌音は東郷語のみならず、土族語互助方言や土族語民和方言の固有語にもにも現れる。土族語互助方言ではある位置でのみ現れるのに対し、土族語民和方言では東郷語に似た条件

で反り舌音が現れる。しかしその条件を音韻的に決定するのは難しい。反り舌音が現れる環境に方言差（あるいはインフォーマント差）があるかという点、そうではなく、土族語民和方言については照那斯圖、李克郁（1982）のデータ（民話方言 1）と Slater（2003）や Chen 他（2005）（民和方言 2）のデータの間には反り舌音の現れ方は全く一致している。土族語互助方言は照那斯圖、李克郁（1982）、東郷語は布和等編（1983）に基づく。

文語		土族語		東郷語		
		互助方言	民和方言 1	民和方言 2		
		tɕ	tɕ	q	tɕ	
1	či	tɕə	tɕi	qi	tɕi	あなた
2	nabči	laɕdzi	laɕtɕi	lekheqi	latɕən	葉
		dʒ	tɕ	q	tɕ, dʒ	
3	güyiche-	kuiidzə-	kuitɕi-	—	kuitɕə-	追いつく
4	qayučin	xauudzin	qautɕin	khaoqin	quaitɕən	古い
5	qančui	xandzə	qantɕi	khanqi	ɕandzɔŋ	袖
		dʒ	dʒ	j	dʒ	
6	jayura	dziuura	dzaura	jiura	dʒəura	中間
7	jegüden	dziuudən	dzaudɔŋ	jiaodong	dʒaudzin	夢
8	jida	dziida	dzida	—	dʒida	矛
9	tejiye-	tədzee-	tedze-	tiejie-	tɕiedzə-	養う
10	kejiye	kədzee	kedze	kejie-	giədʒə	いつ
		tɕ	tɕ	ch	tɕ, dʒ	
11	(čai)	tɕaa	tɕa	cha	tɕa	お茶 ⁽⁷⁾
12	čay	tɕag	tɕag	čeghe	tɕa	時間
13	čayan	tɕagaan	tɕagan	chighang	tɕican	白い
14	čina-	tɕinaa-	tɕina-	čina-	tɕina-	煮る
15	čögen	tɕoon	tɕon	chuang	tɕoɕon	少ない
16	čisun	tɕise	tɕudzi	chuzi	tɕusun	血
17	časun	tɕase	tɕaɕdzi	—	dʒasun	雪
18	öčügedür	tɕigudur	tɕugedur	—	fudʒukudu	昨日
		dʒ	dʒ	zh	dʒ	
19	jayu-	dziauu-	dʒau-	—	dʒau-	嘯む

20	jalayu	dzialiuu	dʒalau	—	dʒalau	若い
21	jöb	dʒob	dʒo	zhuo	dʒo	正しい
22	jegü-	dʒoo-	dʒo-	zhuo-	dʒo-	身につける
23	jögelen	dʒoolon	dʒolen	—	dʒolien	軟らかい
24	jirüken	dʒirge	dʒurgi	zhuerge	dʒukə	心臓
25	juljaya	dʒildʒic	dʒudʒugar	zhazhaguer	dʒundʒuka	動物の子
26	anjisun	ndʒasə	andʒasi	—	andʒasun	鍬
27	ɣajar	gadʒar	gadʒar	ghazher	gadʒa	土地
		ɕ	ʃ	sh	ʃ	
28	sigesün	ɕesə	ʃsi	shersi	ʃsun	尿
29	sigüderi	ɕiuudere	ʃəuderi	—	ʃaudzieru	露
30	sirege	ɕiree	ʃiri	—	ʃire	机
31	sini	ɕinə	ʃini	shini	ʃiini	新しい
32	sira	ɕira	ʃira	—	ʃira	黄色
33	sira-	ɕiraa-	ʃira-	—	ʃira-	焼く
		ɕ	x		tʃ	
34	oči-	ɕə-	ɕi-	xi-	etʃi-	行く
		ɕ	ʃ		ɕ, ʃ	
35	singen	ɕengen	ʃengen	—	ʃengien	薄い
		ɕ	ʃ		ɕiŋkien	〃
		ɕ	ʃ		s	
36	sibüge	ɕiuuge	ʃubigi	—	sumuk	錐
		ɕ	ʃ	sh	ɕ	
37	sirügün	ɕirən	ʃurun	—	ɕieru	粗い
38	iniye-	ɕinee-	ʃini-	shini-	ɕinie	笑う
		ʃC	ʃC		ʃ	
39	sidün	ʃdu	ʃdu	—	ʃiduŋ	齒
		ʃC	ʃ(V)C	sh	f	
40	yeke	ʃge	ʃ(u)go	shuguo	fugi	大きい
		ʃC	sC	s	V	
41	usun	ʃdzu	sdzu	suzu	usu	水
		ɕC	ɕC		ʃ	
42	iče-	ɕdʒee-	ɕdʒe-	—	ʃidʒe-	恥じる
		s	ɕ		ɕ	

43	sere-	serə-	ɕeri-	—	ɕieri	醒める
		sC	ɕC	x	s	
44	saki-	sgə-	ɕ(i)gi-	xige-	sagi-	待つ／守る

以上から分かることは、固有語における反り舌音は東郷語では破擦音 $j > dz$, $ɕ > ts$ に関しては完璧に起こっているが、摩擦音 s の場合は事情は単純ではない。 e の上昇化及びそれに伴う二重母音化と反り舌音化が複雑に関与している。

漢語の影響が強い土族語民和方言でも固有語に反り舌音が生じるが、その条件ははっきりしない。前舌母音の前では ts , dz にはなりにくいとは言えそうである。土族語互助方言ではある子音の前にのみ s が現れる⁽⁸⁾。

4. 3. 音節末子音の回避、脱落

一ノ瀬 (1994:180) は、東郷語の音節構造は著しく単純化し、閉音節の音節末にたつ子音は、 n か η に限られると述べ、これが漢語の影響であると主張している。Field (1997:109-150) も同様のことを述べている。東郷語の音節の変化については Bu. Bulay (1981) で記述されていることで Field の記述には新しいものはない。

開音節化の傾向は東郷語のみならず、他の言語でも多かれ少なかれ起こっている。最も顕著なのは音節末の g , γ 回避であり、脱落したり、母音化したり η に変化したりしている。音節末の b についても東山方言では脱落したり r や η に変化したりしている。音節末の l が鼻音になるという現象は東郷語では普通に見られるが、同様の現象は康家語にもわずかに観察される。なお個別例ではあるが、malta-「掘る」の l は河湟語のすべての言語で鼻音になっている。22 に示していない保安語も mantal-である。土族語東溝、東山、紅崖子溝は清格爾泰編著、李克郁校閲 (1988:369-396)、丹麻は Limusishiden & Kevin Stuart (1998)、康家語は孫玄開主編、斯欽朝克圖著 (1999)、東郷語は布和等編 (1983) より引用する。

	文語	土族語				康家語	東郷語
		東溝	東山	紅崖子溝	丹麻		
1	aruy	arɔɕ	arɔɕ̥	arag	arog	aruɕ	籠
		arag				arɕu	〃
2	uruy	urɔɕ	urɔɕ̥	urɔɕ̥(ɕ)	rog	—	ureu
		urag		urag			〃
3	bulay	bulag	bulɔ̥(ɕ)	bulɔɕ	bulog	—	bulɔ̥
			bulag				〃

4	buday	budoꝓ	budoꝓ	budoꝓ	budog	—	—	染料
5	bičig	pədzic	pədzɔꝓ	pədzic	pijiũ	pətʃiũ	—	文字
6	burčay	pudzig	pudzoꝓ	pudzo(a)ꝓ	pujog	pədzəꝓ	pudzaꝓ	豆
7	qayinuy	xvinoꝓ	xainoꝓ	xainoꝓ	—	—	—	ヤク
8		sba:uag	ʃba:uoꝓ	mba:uag	bawog	—	—	蛙
9	tayay	tʃec	tʃoꝓ	tʃag	teoꝓ	—	teiʃaꝓ	棒
		tʃoꝓ						〃
		tʃag						〃
10	čečeg	təidzəꝓ	təidzoꝓ	təidzig	qijiũ	tʃitʃiũ	tʃidzəꝓ	花
		təidzig				tʃidziũ		〃
11	jarimday	dzəntoꝓ	dzentoꝓ	dzəntoꝓ	jantog	—	—	半分
12	lab	lab	lar	lab	—	—	—	確かに
13	tobči	tebdzə	tecdzə	tefdzə	—	—	tədzə	ボタン
		terdzə	terdzə					〃
14	dabusun	dabse	dardzə	dabse	—	—	dənsun	塩
		darsə	darsdzə	dabdzə				〃
		dəsse						〃
		dardzə						〃
15	jöb	dzob	dzəꝓ	dzəb	jub	—	dzoꝓ	正しい
		dzyərd	dzyəꝓ	dzəb				〃
16	altan	xaldan	xaldan	xaldan	halidan	ənto	əntəꝓ	金
17	aral	ra:l	ra:l	ra:l	raali	aran	arəꝓ	川原、川
18	temür	təmer	təmer	təmer	timuri	təimoꝓ	təiemuꝓ	鉄
19	yar	gar	gar	gar	ghari	ɣar	qaꝓ	手
20	yal	gal	gal	gal	ghal	ɣar	qaꝓ	火
21	segül	su:l	—	—	suul	sar	əien	尾
						tser		〃
22	malta-	man̩ta-	man̩ta-	man̩ta-	man̩ta-	man̩ta-	man̩ta-	掘る

角道（1982）で指摘したように東郷語の開音節化は名詞語幹末（子音脱落）と動詞語幹末（母音添加）で大きくその方向が異なる。また、東郷語のみならず土族語東山方言、康家語にも類似した音節末子音の回避傾向が見られる。Field（1997:141）は東郷語の音節構造が漢語（回族の漢語）との接触によって生じたものであるのは疑いないと述べているが、結果としての音節構造が一致しているからといって漢語との接触が唯一の原因とはいえない。というのは、Slater（2003）

による土族語民和方言の記述でも結果的には漢語と音節構造が同じになっているけれども、開音節化の方向は東郷語と土族語民和方言では異なっている。次に土族語民和方言について東郷語と比較して検討する。

5. Slater (2003) の主張

Slater (2003) は漢語の音節構造と比較し、Mangghuer (土族語民和方言) の音節構造は漢語の影響で開音節志向の言語に変化したものであると論じている。土族語民和方言の先行研究によるデータと付き合わせると、Slater の記録した言語は比較的最近起こった変化の結果を示している。類似した東郷語の音節構造と比べると、開音節化の方向への変化が両言語では異なっている。

語頭子音連続は東郷語には本来存在しない。一方、土族語民和方言はかつて語頭子音連続が存在したが Slater の資料ではすべて回避されている。

音節末子音で許容される子音への合流以外は、*d, *s を別にすると、東郷語では動詞は語幹末子音のあとに母音を添加するのに対し、動詞以外では語幹末子音が脱落する方向に変化している。一方 Slater の資料では語中では音節末の子音が脱落し、語末 (語幹末) では音節末子音のあとに母音が添加する方向に変化する傾向がある。

以下、音節末子音の有無だけについて検討する。先行研究の資料によると土族語民和方言には音節末子音が存在するが、Slater や Chen の資料では脱落する (1, 2) か、後に母音が添加する (3, 9, 10, 12-16) かして音節末子音は r, n, ng 以外には現れない。東郷語では名詞では子音脱落、動詞語幹末では母音添加が起こっている。Mangghuer は語中の例が少ないので、先行研究の関連するデータを付け加えて示す。下線部が問題となる子音を表す。なお 5, 6, 7 はモンゴル文語では第二音節に母音がある。

文語	Тодаева (1973)	照那斯圖 (1982)	清格爾泰 (1988)	Slater (2003)	東郷語、布和 (1987, 1983)	
				Chen (2005)		
語中						
1 kebte-	—	—	—	kidie-	kidziə-	横になる
2 nögči-	—	—	no:tci-	nuoqi-	—	過ぎる
3 nabčín	—	la <u>t</u> ci	—	lek <u>h</u> eqi	latʂəŋ	葉
4 čabči-	чав <u>ч</u> i-	—	—	—	—	切る
5 dabusun	да <u>б</u> ce	da <u>б</u> si	da <u>п</u> udzɿ	—	daŋsu	塩
6 debis-	де <u>б</u> ce-	—	—	—	—	敷く
7 dabusay	—	da <u>б</u> sag	—	—	—	膀胱

8	giski-	—	kəsg̥i-	kəd̥zi-	—	—	踏む
	語末 (語幹末)						
9	čečeg	чиджаг	—	tɕidziç	qijighe	tʂidzə	花
		чичег					
10		баг	—	—	beghe	—	木
11	bičig	пуджиг	pudziç	pudziç	—	—	文字
12		таш	taç	taçsa	tashi	taçi	石
13	bos-	бос-	bosi-	bos̥i-	bosi-	bosi-	起きる
14	ölös-	—	losi-	—	luosi-	oliəsi-	飢える
15	naγad-	наγу-	—	naɖu-	naɖu-	naɖu-	遊ぶ
16	ög-	yɯγ-	—	—	hu-	ogi-	与える

東郷語に関しては角道 (1982) で記述したので結果だけを以下に示す。*d, *s は母音添加、それ以外は動詞とそれ以外で異なった変化をしている。—は該当例が存在しないこと、空白は例が見つからないことを示す。() は例が少なくむしろ例外的なケースである。ただし n(g) は n ~ ng を表し、n と ŋ を区別しないで n で表す。

音節末子音	*l	*m	*n(g)	*r	*g	*γ	*b	*d	*s
語中 動詞以外	n, (φ)	n	n	φ	φ	φ	φ	dV	sV
語中 動詞		(mV)	n	φ	(gV)	φ	φ		
語末 動詞以外	n	n	n	φ	φ	φ		dV	sV
語幹末 動詞	lV	—	—	rV, (φ)	gV	(φ)	gV	dV	sV

Mangghuer の場合は語中か語末 (及び語幹末) で異なった変化をしている。—は該当例が存在しないこと、空白は例が見つからないことを示す。() は例が極めて少ないことを表す。ただし n(g) は n ~ ng を表す。

音節末子音	*r	*l	*m	*n(g)	*g	*γ	*b	*d	*s
語中 動詞以外	r, (φ)	r		n(g)			(khV)	(φ)	
語中 動詞			(mV)	n(g)	φ	φ	φ		
語末 動詞以外	r, (φ)			n(g)	gV	gV			sV
語幹末 動詞	(φ)	lV	—	—	gV			dV	sV

同じように開音節化への変化をしているとはいっても、変化の過程が異なる。両言語は結果的に漢語の音節構造と類似したものになっているに過ぎない。なお音節構造全体については角道（2006）を参照されたい。

6. 口蓋化

明らかに漢語の影響であると考えられる事例について一つだけ例を加える。ただし影響を及ぼす範囲は言語によって異なっている。漢語の臨夏方言等では普通話の *ti, di* が *tei, dzi* に対応し、康家語、東郷語の固有語にも影響を及ぼしている。保安語大塋方言の例は佐藤（2004）、康家語は孫玄開主編、斯欽朝克圖著（1999）、東郷語は布和等編（1983）及び阿・舍勒夫、馬国忠、阿・伊布拉黑麦、陳元龍編著（2000）（括弧で記した語）より引用する。

		保安語	康家語	東郷語		
		大塙				
漢語	1	ti² (提)	—	tʃile-	(qila-)	提
	2	tie³xian¹ (鉄鋏)	tɕixan	tʃixɔ	(qighan)	鉄シャベル
	3	tian² (甜)	tɕen	—	tɕien	甘い
	4	tian¹qi⁴ (天気)	tɕendzi	tɕientɕi	—	天気
	5	dian⁴ (電)	dzen	dɕian	dɕien	電
	6	ding¹zi (釘子)	dɕindzi	dɕindzu	—	釘
	7	di¹ban³ (地板)	—	dɕiban	(jiban)	床板、板敷き
モンゴ ル語	8	tejiye-	tɕidze-	tʃidze-	tɕiedze-	養う
	9	temür	tamer	tʃimo	tɕiemu	鉄
	10	terigün	terun	tura	tɕiarun	頭
	11	tegerme	terman	tomo ~ tormo	tɕieman	臼
	12	degere	decon	dere	dɕiere	上
	13	dörben	deran	dero	dɕieron	四
	14	degü	dəu	devu	dɕiau	弟
	15	degəsü	desun	deisun ~ desun	dɕiesun	縄

保安語大塋方言、康家語、東郷語はともに漢語の影響を強く受けている言語であり、借用語には口蓋化子音が現れる。固有語における口蓋化子音の現れ方は東郷語が最も多く、康家語にはわずかに見られるが、保安語大塋方言には「養う」しか見られない。もっともこの語は土族語でも東溝 *tədzee*、那龍溝 *tɕidzie*、沙塘川 *tɕidzie*、民和 *tədze-*、民和 (Slater) *tiejie* のように現れ、

那龍溝、沙塘川では口蓋化しているし、『保安語詞彙』でも *tɕidze-* という口蓋化した形式で記載されているので、漢語の影響とは言えないかもしれない。康家語と東郷語の差は漢語の影響の強さというよりも、口蓋化を起こす条件を満たしているかどうかに関わっている。つまり、モンゴル文語には存在しない *ti, di* の音連続が生じるかどうか、さらに言うと、*t, d* の直後の前舌母音が高母音化するかどうかに関わっている。

7. 語末鼻音

言語接触による変化ではなく、ドリフトと考えられる例を一例だけ付け加えることにする。以下特に *n* の保存状態について見ていく。東部裕固語では語末の *n* がよく保存されているのに対し、土族語互助方言では *o* の直後でのみ *ŋ* に変化している。保安語ではすべて *ŋ* になっている。その他の言語では *n* がいつ保存されいつ *ŋ* に変化するかを音韻上の用語を用いて規定するのは非常に困難である⁹⁾。ただし東郷語に関しては *n* と *ŋ* は対立しないで前舌母音の直後には *n* が現れ、後舌母音の直後には *ŋ* が現れるという劉照雄編著 (1981) の記述もある。この現れ方は西北官話における鼻音の現れ方と同じである。以下に引用した布和の資料では *n* と *ŋ* を書き分けているが、上述の条件には当てはまらない。東郷語の鼻音の詳しい状況については角道 (1995:46-50) で述べた。保安語では *ŋ* の直前の母音が多くは広い母音に変化している。康家語では広母音 *o* の直後で鼻音が脱落している。脱落する前の段階はおそらく *ŋ* という子音だったであろうと思われる。東部裕固語は保朝魯等編 (1985)、土族語互助及び民和 1 は照那斯圖、李克郁 (1982)、土族語民和 2 は Slater (2003) 及び Chen 他 (2005)、康家語は孫玄開主編、斯欽朝克圖著 (1999:278-306)、東郷語は布和等編 (1983) より引用する。

文語	東部 裕固語	土族語 互助	土族語 民和 1	土族語 民和 2	保安語	康家語	東郷語	
<i>n</i>	<i>n</i>	<i>n</i>	<i>ŋ</i>	<i>ŋg</i>	<i>ŋ</i>	<i>n</i>	<i>ŋ</i>	
1 <i>kūmūn</i>	<i>kun</i>	<i>kun</i>	<i>kuŋ</i>	<i>kong</i>	<i>kuŋ</i>	<i>kun</i>	<i>kuŋ</i>	人
2 <i>būdügün</i>	<i>body:n</i>	<i>budən</i>	<i>beduŋ</i>	—	<i>bedeŋ</i>	<i>bedun</i>	<i>biəduŋ</i>	粗い
3 <i>jegüden</i>	<i>dzy:den</i>	<i>dziuuden</i>	<i>dzauduŋ</i>	—	<i>dzudaŋ</i>	<i>dʒudən</i>	<i>dʒaɥdzɪŋ</i>	夢
4 <i>čögen</i>	<i>tʃy:n</i>	<i>tɕoon</i>	<i>tʃoŋ</i>	<i>čuəŋ</i>		<i>tʃyn</i>	<i>tʃoɕoŋ</i>	少ない
5 <i>udayan</i>	<i>uda:n</i>	<i>udaan</i>	<i>udaŋ</i>	—	—	—	<i>udaŋ</i>	遅い
6 <i>uyitan</i>	<i>jutan</i>	<i>juutan</i>	<i>xuitaŋ</i>	—	—	—	<i>uitaŋ</i>	狭い
7 <i>qayan</i>	<i>xɑ:n</i>	<i>xaan</i>	<i>qaŋ</i>	—	—	—	—	皇帝
<i>n</i>	<i>n</i>	<i>n</i>	<i>ŋ</i>		<i>ŋ</i>	<i>n/ŋ</i>	<i>ŋ</i>	
8 <i>tabun</i>	<i>tɑ:βən</i>	<i>taavun</i>	<i>tabeŋ</i>	—	<i>taweŋ</i>	<i>tavun/ŋ</i>	<i>tawuŋ</i>	五
<i>n</i>	<i>n</i>	<i>n</i>	<i>ŋ</i>	<i>ŋg</i>	<i>ŋ</i>	(<i>ŋ</i>)	<i>ŋ</i>	

言語接触かドリフトか—河湟語の場合—

9	yayun	ja:n	jaan	jaŋ	yang	jaŋ	jo~jaŋ	jaŋ	何
	n	n	n	n	n	ŋ	φ	n	
10	ken	ken	ken	ken	kan	kaŋ	ko	kiən	誰
11	noyan	nijon	nojoon	nojan	—	—	nio	nojon	官吏
	n	n	n	n	n	ŋ	φ	n	
12	jögelen	dzy:lən	dzoolon	dzolen	—	dzulaŋ	dzilo	dzoliən	柔
13	küiten	kyten	kuiden	kuiten	—	kitan	kuito	kuitɕiən	寒い
							kuitʃo		〃
14	köngen	køŋgen	kongon	konggen	kuanguan	—	—	gongien	軽い
	n	n	ŋ	ŋ	ŋ	φ	ŋ		
15	qalayun	xalu:n	xaloŋ	qaluŋ	—	χeleŋ	χulo	qaluŋ	熱い
	n		ŋ				φ	n	
16	egülen	—	uloŋ	—	—	—	ulio	olien	雲
	n	n	ŋ			ŋ,	n	n	
17	jayun	dzu:n	dzoŋ	—	—	ndzeŋ	dzun	—	百
							dzyn		〃
	n	n	n	ŋ	n	ŋ	φ	ŋ	
18	qayučin	xutʃən	xauudzin	qautɕiŋ	khaoqin	xi:tɕaŋ	χuaitʃo	quaitʃəŋ	古い
	n	n	n	ŋ	ng,n	ŋ	φ	ŋ	
19	olan	olon	ulon	ulaŋ	wulang	eleŋ	ulu	oloŋ	多い
					wulan				〃
	n	n	n	ŋ	ng	ŋ	φ	ŋ	
20	altan	altan	xaldan	artaŋ	—	altaŋ	anto	antaŋ	金
21	arban	harβan	xaran	xarbaŋ	—	harwaŋ	haro	haroŋ	十
22	ulayan	ɬa:n	fulaan	xulaŋ	hulang	fulaŋ	fulo	xuloŋ	赤い
23	nayiman	neiman	naiiman	naimaŋ	—	nimaŋ	naimo	neimaŋ	八
24	narin	narən	narən	nareŋ	—	na:raŋ	naro	naruŋ	細い
25	bayan	bəjan	bajaan	bajaŋ	—	bajaŋ	bajo	bajaŋ	豊かな
26	dörben	dørβen	deeren	derbaŋ	—	deraŋ	dero	dzieron	四
27	čayan	tʃəɕa:n	tɕagaan	tʃacaŋ	chighaŋ	tɕiχaŋ	tχixo	tʃiɕaŋ	白い

以上の現象を大まかに見ると、全体としては $n > \eta > \text{ゼロ}$ という方向に変化するというドリフトがあり、その途中の様々な段階を各言語が留めていると言える。 $n > \eta$ の引き金になるのは、広い母音あるいは後舌母音であり、 $\eta > \text{ゼロ}$ の引き金になるのは広い母音である。

8. まとめ

ブリヤート方言やオルドス方言を除いた東のモンゴル諸方言が閉音節志向の言語であるのに対して、河湟語は開音節志向の言語である。その特徴は語末の短母音の有無にもっとも顕著に現れる。一方、河湟語を除く多くのモンゴル諸語（諸方言）では第一音節の母音が保存されているのに対し、河湟語は第一音節の母音を脱落させる方向に変化するという強いドリフトがある。この違いをアクセントの位置の違いに求める説があるけれども、軽々しくは結論を下せない。オルドス方言やカルムイク方言を除く多くのモンゴル諸語（諸語）に共通の特徴は語幹末の *n* から *ŋ* への変化である。河湟語では東部裕固語だけがこれに抵抗している。河湟語を他のモンゴル諸語（方言）から区別する特徴の一つはゼロ副動詞の普及である。

以上論じてきた点を個別的にまとめると次のようになる。語頭子音連続はドリフト、ただし土族語互助方言は結果的にはチベット語と同じになる。与位格の用法の一部は共通祖語を感じさせるものがあるが、決定的な根拠はない。しかしチベット語の影響とは必ずしも言えない。*i* > *e* はチベット語との言語接触であろうが、その及ぶ範囲は言語（方言）によって異なる。ゼロ副動詞はドリフトであると考えられる。ただし漢語との接触による影響でその現象が促進された面は否定できない。東郷語と土族語民和方言の反り舌音は漢語との言語接触で生じたものであるが、土族語互助方言はチベット語との言語接触を考えなければならない。いずれにしても反り舌音が起こる条件が異なる。音節末子音の回避はドリフトである。ただし東郷語は結果的には漢語と同じになる。Mangghuer（土族語民和方言）の場合は音韻分析の仕方と深い関わりがある。語末の母音は本来 off-glide の母音である。口蓋化はまぎれもなく、漢語臨夏方言の言語接触によって生じたものである。語末鼻音の変化はドリフトである。この現象は東部の蒙古語諸方言や達斡爾語でも広く起こっている。ただし東郷語は結果的には漢語西北官話と同じになる。

註

- (1) Sapir の drift に関しては原書の外に、泉井久之助の翻訳、平林（1993）、『言語学大辞典』を参考にした。
- (2) 河湟語の語頭子音連続の型について述べたものに Qasbayana (1998) があるが、これは『東部裕固語和蒙古語』、『土族語和蒙古語』、『東郷語和蒙古語』、『保安語和蒙古語』などの書物に基づいたものである。語頭子音連続は下位方言でもかなりの違いがある。土族語互助方言に関しては角道（1989, 1990, 1997, 2005）を参照のこと。東郷語 2, 3, 4 は語頭の母音が脱落した以外に次の子音も脱落している。
- (3) 「～を聞く」の用例がほとんど得られないが、土族語民和方言には与位格を取る例が見られる。しかし次の 1 例を除いてあとはすべて対格を取る。
 Ni-ge binbier ning=du chenli kuer danang, 『中国民和土族民間故事』 38(143)
 この 兵士が これを 聞いている
- (4) Kalsang Norbu 他（2000）は rDo sbis（道緯）及び Reb gong（同仁）の方言に基づいた記述であるが、チベット文語の ag, eg, id, ud, in, un, ib, ub, im, um, i', u', ir, ur, il, ul, i, u の主母音に対応する部分に [e] が現れる。チベット文語の i のみならず u も多くの場合アムド方言で

- [ə]に対応する。堅賛道傑、貢保草（2000）は天祝ゲセルの韻文の部分に現れるチベット語がアムド方言とはわずかに違うとしている。[ə]が現れるのは、文語の id, ud, in, un, en, ib, ub, im, um, i', u', ir, ur, er, il, ul, el, i, u, e の主母音の部分である。
- (5) 照那斯圖（1981:89）は 1, 2, 5, 6, 7 及びモンゴル文語の tejiye-「養う」に対応する形式を示しているが、tejiye-はこの議論とは関係しないので省き、qonin「羊」、morin「馬」の例を付け加えた。
- (6) 一ノ瀬が挙げている例を日本語で示すと次のようになる。| がゼロ副動詞である。複合動詞：「帰って | 行かせた」、「降りて | 来させた」、動詞の重複形：「恐れに | 恐れて」、「走りに | 走って」、動詞+補助動詞：（省略）、意味的独立性を有する 2 動詞の結合：「打ち | 殺す」、「走り | 疲れる」、多動詞結合（2 つあるいは 3 つ連続して現れる）：「跳び | 起きて | くる」と、「走り | 逃げて | きた」、「跳び | 起きて | きた」、複述語をもつ単文（主格が 1 つしか現れずに 2 つの述語が現れる場合）、並列：「オオカミも恐れず | 賊も恐れず」、「おまえになにもしないし | おまえの政權を奪いにも来ない」、従属：「打ち殺すと | すぐに」、複文（2 つの主格補語にそれぞれ述語がついたコトが結合したもの）：「君が泣こうが | 泣くまいが |」。
- (7) 河湟語の「お茶」はモンゴル文語の čai の最後の i の要素に対応するものが存在しないことから考えて、モンゴル文語の子孫ではなく別に漢語から直接借用したものだと思われる。一般に漢語からの借用語における反り舌音は河湟語でも反り舌音になる。しかし、固有語もすべて反り舌音化する東郷語を除くと、「お茶」の語頭子音に反り舌音を持っているのは土族語民和方言だけである。
- (8) 土族語互助方言の ʂ は tɕ の直前には通常は現れないが、天祝方言に qar-ʂtɕe 1444「出て」という形が記録されている。
- (9) 『中国民和土族民間故事』の範囲で言うと、固有語の n の直前に現れる母音は i, u, a であり、ng の直前に現れる母音は o, ua, a である。漢語借用語の n の直前に現れる母音は a, ia, ua, e, i, u であり、ng の直前に現れる母音は a, ia, ua, e, i, o, io である。共に主母音 o の直後には ng しき現れない。普通話の n が ng になったり、逆に ng が n になっているものが約 20 % ある。

参考文献

- 樋口康一（昭 58 = 1983）「チベット語と土族語の言語接触について」『チベット文化の総合的研究』昭和 57 年度特定研究報告書 76-84
- 平林幹郎（1993）『サピアの言語論』勁草書房
- 一ノ瀬恵（1994）「ドゥンシャン語の動詞形態法に見られる中国語の干渉 —接尾辞型から孤立語型へ—」『北海道大学文学部紀要』XLII-2（通巻第 79 号）171-202
- 角道正佳（1982）「ドゥンシャン方言の音韻変化」『大阪外国語大学學報』第 59 号 17-35
- 角道正佳（1989）「Geser redzia-wu（土族語の下位方言）の言語 —分布—」『大阪外国語大学學報』第 77 号 23-44
- 角道正佳（1990）「土族語（モンゴル語）の一方言の自由交替 —Aus der Volksdichtung der Monguor の言語—」『大阪外国語大学論集』第 3 号 65-91
- 角道正佳（1991）「土族語（モンゴル語）の類義語 sge-, uje-, nau-について」『大阪外国語大学論集』第 5 号 25-48
- 角道正佳（1995）「東郷語の音韻体系」『大阪外国語大学論集』第 13 号 31-56
- 角道正佳（1997）「天祝土族語の特徴『格薩爾文庫』第三巻の資料に基づいて」『大阪外国語大学論集』第 17 号 33-61
- 角道正佳（2005）「互助土族語丹麻方言の特徴」『大阪外国語大学論集』第 31 号 187-213
- 角道正佳（2006）「Mangghuer（土族語民和方言）の音韻変化は漢語の影響と言えるか—東郷語との比較の観点から—」城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会編（2006）『実験音声学と一般言語学』東京堂 181-186
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編著（1996）『言語学大辞典』第 6 巻 術語編、三省堂
- 栗林均（1988）「モンゴル語族と近隣の諸言語との言語接触 —中国青海省、甘肅省の「孤立的」

- モンゴル系諸言語を中心に」早稲田大学北方言語・文化研究会『民族接触—北の視点から—』六興出版 273-289
- 佐藤暢治 (1996) 「チベット語アムド方言来源の借用語からみた保安族におけるチベット族との民族接触」『ニダバ』(西日本言語学会) 第25号、28-37
- 佐藤暢治編 (1996) 『資料 保安語大河家方言におけるチベット語アムド方言からの借用語』広島大学
- 佐藤暢治 (2004) 『大増保安語の言語資料』平成14～16年度科学研究費補助金若手研究(B)、中国積石山地域の消滅の危機に瀕した言語「保安語」の調査研究、広島大学
- 阿・伊布拉黑麦記録、整理 (1987) 「東郷語話語材料」『民族語文』一九八七年第三期 (総第四五期) 69-69
- 阿・舍勒夫、馬国忠、阿・伊布拉黑麦、陳元龍編著 (2000) 『東郷語漢語詞典』甘肅民族出版社
- 保朝魯等編 (1985) 『東部裕固語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書017 内蒙古人民出版社
- 保朝魯、賈拉森編 (1988) 『東部裕固語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書018 内蒙古人民出版社
- 布和、劉照雄編著 (1982) 『保安語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 布和編著、硯精扎布校閱 (1986:45) 『東郷語和蒙古語』蒙古語族語言方言研究叢書007 内蒙古人民出版社
- 布和等編 (1987) 『東郷語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書009 内蒙古人民出版社
- 布和等編 (1983) 『東郷語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書008 内蒙古人民出版社
- 陳乃雄等編 (1986) 『保安語詞彙』蒙古語族語言方言研究叢書011 内蒙古人民出版社
- 陳乃雄 (1988) 「蒙古語族語言詞彙」『内蒙古大学学报』哲学社会科学版 一九八八年第一期 (總第60期) 105-116
- 甘肅省《格薩爾》工作領導小办公室、西北民族学院《格薩爾》研究所編 (1996) 『格薩爾文庫』第三卷 甘肅民族出版社
- 堅贊道傑、貢保草 (2000) 「試析土族《格薩爾》唱詞中的藏語音位系統」『西北民族学院学报』(哲学社会科学版 106-113
- 劉照雄編著 (1981) 『東郷語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 清格爾泰等編 (1988) 『土族語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書015 内蒙古人民出版社
- 清格爾泰編著、李克郁校閱 (1991) 『土族語和蒙古語』蒙古語族語言方言研究叢書013 内蒙古人民出版社
- 孫玄開主編、斯欽朝克圖著 (1999) 『康家語』中国新發現語言研究叢書 上海遠東出版社
- 照那斯圖編著 (1981a) 『土族語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 照那斯圖編著 (1981b) 『東部裕固語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書 民族出版社
- 照那斯圖、李克郁 (1982) 「土族語民話方言概述」《民族語文》編輯部編 1982) 『民族語文研究文集』青海民族出版社 458-487
- Chen Zhaojun, Li Xingzhong, Lü Jingliang, Keith W. Slater, Kevin Stuart, Wang Xiangzhen, Wang Yongwei, Wang zhenlin, Xin Huaizhi, Zhu Meilan, Zhu Shanzhong, Zhu Wenhui, Zhu Yongzhong (2005) *Folktales of China's Minhe Mangghuer* (『中国民和土族民間故事』) Lincom Europa.
- Field, Kenneth L. (1997) *A Grammatical Overview of Santa Mongolian*, Ph.D. dissertation, University of California, Santa Barbara.
- Heissig, Walther (1980) *Gäser rēdzia-wu, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tujen)-Version des Geser Epos aus Amdo*, Otto Harrossowitz, Wiesbaden.
- Janhunen, Juha (2003) *The Mongolic Languages*, Routledge Curzon, Taylor & Francis, London and New York.
- Kalsang Norbu, Karl A. Peet, dPal Idan bKra shis, Kevin Stuart (2000) *Modern Oral Amdo Tibetan, A Language Primer*, Studies in Linguistics and Semiotics Volume 5, The Edwin Mellan Press, Lampeter, CeredigionWales, United Kingdom.

- Krippes, Karl Anthony (1992) *The Reconstruction of Proto-Mongolian *p-*, Ph. D. dissertation, Indiana University.
- Li, Charles N. (1986) 'The Rise and Fall of Tones through Diffusion (1),' *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, Berkeley Linguistic Society, University of California, Berkeley, California, 173-185.
- Limusishiden & Kevin Stuart (1998) *Huzhu Monghul Folklore, Text & Translations*, Languages of the World/ Text Library 03, LINCOM EUROPA.
- Róna-Tas, A. (1960a) 'Remarks on the Phonology of the Mongour Language,' *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, X/3, 263-290.
- Róna-Tas, A. (1960b) Tibetan Loanwords in the Shera Yöğur Language, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, XV, 259-271
- Róna-Tas, A. (1966) *Tibet-Mongolica, The Tibetan Loan Words of Monguor and the Development of the Archaic Tibetan Dialects*, Mouton & Co., The Hague.
- Sapir, Edward (1921) *Language, An Introduction to the Study of Speech*, A Harvest Book, Harcourt, Brace & World, Inc., New York. (エドワード・サピア、泉井久之助訳 (1957) 『言語ことばの研究』紀伊国屋書店)
- Schröder, Dominik (1959) *Aus der Volksdichtung der Monguor*, 1 Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Schröder, Dominik (1970) *Aus der Volksdichtung der Monguor*, 2 Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Slater, Keith W. (2003) *A Grammar of Mangghuer, A Mongolic language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*, Routledge Curzon, Taylor & Francis, London and New York.
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1933) Le dialect monguor parlé par les mongols du Kansou occidental III^e partie *Dictionnaire Monguor-Français*, Imprimerie de l'université Catholique, Pei-p'ing.
- Тенишев, Е. Р., Б. Х. Тодаева (1966) *Язык желтых уйгуров*, Издательство «Наука» Главная редакция восточной литературы, Москва.
- Тодаева, Б. Х. (1961) *Дунсянский язык*, Институт народов азии, Издательство восточной литературы, Москва.
- Тодаева, Б. Х. (1964) *Баоаньский язык*, Институт народов азии, Издательство «Наука», Москва.
- Тодаева, Б. Х. (1973) *Монгорский язык*, Издательство «Наука» Главная редакция восточной литературы, Москва.
- Жалсан (1993) 'Зүүн ёгор хэлэнд үзүүлсэн төвд хэлний нөлөөний хэдэн жишээ' 小澤重男教授退官記念論文集編集委員会編『小澤重男教授退官記念論文と思い出の記』時潮社 195-203
- Bu. Bulay (1981) 'Düngsiyang kele kiged bičig ün kelen ü jarim abiyan u tokiralčaya,' *Öbür mongğol un yeke surγayuli yin mongğol kele bičig sudulqu γaγar un kele bičig ün erdem sinjilgen ü ögülel ün tegübüri*, dörbedüger debter, 157-164.
- Qasbayana (1998) 'Mongğol törül ün kelen ü üge yin ekin ü neyilmel geyigülügci yin tuqai,' *Mongğol kele udqa jokiyal*, 1998 on u 6 duγar quyučaya Vol. 160, 74-79.
- (哈斯巴根 (1998) 「蒙古語族語言的詞首複合輔音」『蒙古語言文學』1998 年第 6 期 (總第 160 期) 74-79)

(2006. 11. 7 受理)